

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 復興支援－19

学校名・団体名	登米市立佐沼中学校
HPアドレス	<a href="http://www.tome-svr.jp/~sanuma-chu/html/index.php?page_id=0">http://www.tome-svr.jp/~sanuma-chu/html/index.php?page_id=0</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	地域総合防災訓練により防災に貢献する生徒を育成する。
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <ol style="list-style-type: none"><li>① 災害の被害を少なくする減災教育を推進する。</li><li>② マンパワーとしての中学生の「災害対応時の行動様式の可能性を引き出す」訓練種目を設定し、その経験値を高めていく。</li><li>③ 地域住民・保護者・協力者との共同・協働を通して「学校が外に開き、実質的な連携を深めてく。」</li><li>④ 知の部分での防災（減災）教育を展開し、その成果を発信していき効果ある防災の考え方を広めていく。</li></ol>	

○実施時期 総合防災訓練に係る会議 6月から実施  
総合防災訓練は11月21日に実施  
授業等での補充学習を2月まで断続的に実施  
事後のアンケート等によると、同じ時期でよいが、テストと日程を重ねない方が望ましいという意見があった。また、地域住民の方からは、この時期だと大きな行事も終わり参加しやすいという意見が出た。  
実施に向けた具体の会議は10月と11月に開催と少し出遅れた感じがする。その結果、当初予定していたボランティアの学生を確保することができなかった。次年度の会議については早い段階から動き出し、人材確保に努めたい。

○訓練内容 全学年  避難行動訓練 (保護者も一緒に)  
1 学年  実地踏査結果を反映した防災マップ作成 (第2版)  
 引き渡し訓練  
(可能な保護者のみ、状況に応じては生徒を校舎内で留め置き安全確保することも想定)  
 家庭での安全点検とその対策  
2 学年  救命救急訓練 (応急手当・心肺蘇生法・AED操作・ロープワーク・運搬法)  
 土嚢づくり訓練 (土入れ～積み上げ)  
 炊き出し訓練 (ガスが遮断されていない想定で、大釜で包装食米を炊く)  
 水の簡単濾過装置づくり  
3 学年  避難所設営訓練 (体育館に a 本部 b 避難スペース, c 救急スペース, d 連絡板, e 配給スペースの作成 f 防寒用品 g 緊急時発電等)  
 グループホームでの支援活動  
全学年  全クラスのアンケートによる「振り返り」とHPや学校便りによる成果発表  
訓練内容については前年度とほぼ同じとした。これは、3年間を通しての活動として捉え、毎年違う訓練を体験できるようにするためのものである。ただし、活動内容について、現場の声を反映させたり、講師からのアドバイスも考慮し、発展させた形での実施となっている。また、時間が足りず、事後に授業等を通して活動したのものもあり、生徒の興味・関心を高め防災に対する意識を高揚させる一助となった。

○事前指導  各教科での「知の部分」展開 (社会・理科・保健体育・家庭科)  
 学級活動または帰りの会等を利用したショート避難訓練の継続  
各学年とも事前学習をして訓練に臨んだ。そのため、当日の動きがスムーズに進み効率よく活動することができた。教科担当や学級担任への負担は大きく、事前学習の段階から地域の方や外部講師の方々にご協力をいただく場面があってもよかったのかと感じた。

○事後指導  教員及び保護者・関係協力者による実施直後の総括評価会議  
事後の総括評価の会議では様々な意見を出していただき、次年度につながるものとなった。学校だけでは気づかないことが多々あると同時に、助成金によって得られたものを有効活用していくことも重要であると実感した。

○実施後の効果

生徒	自助・共助・公助の精神や態度の基礎を身に付けることができた。
教師	地域の人材の再確認と訓練を通して「連携の価値」をさらに認識できた。
保護者	地域防災の担い手として中学生をさらに取り込もうとする発想が生まれたが、参加者が少なく、新たな課題として残った。
地域住民	中学校と更に連携する姿勢が強まった。また、地域の担い手として中学生に様々な知恵を授ける場として活動できた。

生徒の興味・関心を引き出すことができ、日頃受け身で学ぶ生徒が、積極的に行動する姿を見ることができた。東日本大震災以降、災害について学んだり感じたりする機会が増えたことに加え、自ら積極的に関わろうとする生徒が増えたことも、この訓練への意欲的な取組につながっていると思われる。自助・共助・公助の精神は身に付きつつあるが、この訓練をとおして更に発展させられるよう支援していくことが、我々被災地に暮らすものの使命であると感じる。